

6度の事故で
36人が死亡

オスプレイの普天間配備に反対です。

「日米安保は必要、でも基地は沖縄へ」。本当にそれでいいのですか？

◆オスプレイ配備で増大する危険と騒音

アメリカ海兵隊は沖縄県宜野湾市の普天間基地に、新型航空機のMV-22オスプレイを配備しようとしています。旧型のヘリコプターCH-46との交代で、7月には船で那覇軍港に搬入し、10月から普天間基地で運用を開始する計画です。

オスプレイは、左右の翼の先に可動式のエンジンとプロペラがあり、離着陸時にはプロペラを上、飛行時には前に向けます。ヘリコプターのように狭い場所で離着陸し、飛行機のような速度と航続距離があるため、軍隊には便利な機体のようです。

ところがオスプレイは、試作段階から現在までに6回の墜落事故を起こし、36人の死者を出しています。アメリカの専門家からは、エンジン停止などの緊急時に安全に着陸できる仕組みが無いとの指摘も出ています。また離着陸時の騒音や、飛行時の低周波音は従来機より大きくなるようです。

オスプレイの配備に対して、普天間基地周辺の住民をはじめ、宜野湾市長や那覇市長も反対の声を上げています。しかし日本政府は「安全だ」というだけで、根拠も示さないままにオスプレイを沖縄に押し付けようとしているのです。



2004年8月13日、普天間基地に着陸しようとした海兵隊のヘリコプターが、基地に隣接する沖縄国際大学に墜落しました。炎上した機体は校舎を焼き、部品が周辺に飛散しました。事故原因は整備不良です。普天間基地は宜野湾市の真ん中にあり、周りには民家・学校・病院があります。基地周辺の住民は、航空機の騒音に悩まされ、墜落の危険性にさらされています。日米政府がいま行うべきことは、オスプレイの配備ではなく、普天間基地の閉鎖です。